

特集

帝国日本の残像

地域研究と植民地学

特集にあたって

私は現在、中東地域研究者の一人としていくつかの地域研究プロジェクトに関わっている。しかしかねて疑問に感じてきたことは、このようなプロジェクトがアメリカ合衆国によって第二次世界大戦後の冷戦下におけるグローバルな地域戦略のなかで営々と築き上げられてきた「地域研究」とは質的に異なっていると主張しうるのである。新たな学際的領域としてその重要性を認められつつある地域研究は、アメリカ合衆国の覇権と深く結びついた従来の「地域研究」とは異なる新たな知の地平線を切り開けるのであろうか。

もとより、地域研究者として支配-従属の立場から植民地主義的支配を批判するだけの議論はあまりにもナイーブすぎよう。現実の事態はもっと重層的である。植民地主義が作り上げた支配-従属の権力関係を逆転すればナショナリズムを唱える被抑圧者が自らの民族解放を達成できるという夢は現実の前に無残に打ち砕かれたからである。かつて米ソ対立のはざままで新植民地主義とも呼ばれた跋行的な歴史発展のプロセスは、アジア・アフリカ・ラテンアメリカの苦渋に満ちた現代史に示されている。そして冷戦終焉後のポストコロニアルとも呼ばれる新たな状況の現出を契機として、植民地主義のもつ支配の重層的構造に再度関心の目が注がれている。本特集に論考を寄せた一人である富山一郎の言葉を借りれば、「植民地主義により生産された言説が脱植民地主義というコンテキストで再び生産され」「植民地主義において支配の客体として設定された他者像は、戦後の地域研究の中に自画像として紛れ込む」ことになるからである。20世紀末に至って単線論的な発展論のシナリオがことごとく破綻してしまった。グローバル化を伴う支配と従属、中心と周辺、あるいは主体と客体の相互関係は入れ子構造をもつことになったのである。

歴史学、人類学、政治学などの地域研究の重要な柱となってきた研究分野では、植民地主義との共犯関係を改めて問い直す作業はこれまでも執拗に繰り返して行われてきた。明治期以来、東アジアにおける植民地大国として発展してきた「大日本帝国」において、その植民地政策実施に伴って蓄積されてきた植民地主義的な知の遺産をどのように克服していくかの問いかけは、その意味ではすでに常識の部類に属するといってもいい。新しい学際的領域としての地域研究は、「大日本帝国」的な伝統とはいったんは断絶したところで成立したこともあって、既存の諸研究分野とはいささか事情を異にする。しかし地域研究は、政策指向をもつアメリカ的「地

域研究」のプロトタイプともいえる「大日本帝国」の植民地政策学あるいは植民地学の伝統と本当に切断された場で成立したといえるのであろうか。本特集「帝国日本の残像——地域研究と植民地学」は以上のような重層的な問題構成を意識しつつ企画された。冷戦後の混迷状況を担う新たな学際的領域としての地域研究は、かつての「大日本帝国」の植民地政策と結びついた知的伝統をもつ植民地学に対して、いかなるポジションをとることができるのか。換言すれば、過去と現在との連続と断絶をいかに捉えるかの問いかけである。現在の地域研究と過去の植民地学が連続しているという立場に立つならば、地域研究はどのような意味で植民地主義的な過去を清算していないのか。あるいはさらに突っ込んで、そもそも、地域研究に内在する〈帝国の遺産〉をその功罪の両面から克服しようとする学的な努力が、一部の研究者を除いて、これまで何故に等閑視されてきたのか。現在、そのような克服が可能になったのだと地域研究者は果たして言明できるのか。

新しい地域研究が「日本」という自画像としての〈地域〉を対象とした場合、アイヌ民族、在日朝鮮・韓国人、沖縄人などを包括した「日本」において、ポストコロニアル的契機をはらむ現在の時点から、誰が誰に向かって何を語るることができるのか。そもそも「われわれ」自身が誰であり、どこにいるのか、その発話の主体と場をも問われる所以なのである。

本特集に寄稿された三論文はいずれも、「日本」という国民国家を自明の前提とするのではなく、北海道、沖縄、台湾、朝鮮半島、サハリン、南洋諸島、旧満州、中国、ひいては東南アジア諸国など「日本」のかつての植民地あるいは日本軍占領地にまで視野を広げ、植民地宗主国と従属地域との権力関係のなかでたち上げられてきた「日本」国家における他者認識の形成過程とその〈場〉を問題化している。特集の三論文は、戦後、第二次世界大戦、そして19世紀後半という三つの異なる時期を対象としている。すなわち、地域研究の「訓練場」としての戦後沖縄研究の生成（富山一郎論文）、第二次世界大戦中の民族学と兵要地誌（中生勝美論文）、そして「大日本帝国」支配のプロトタイプとしてのアイヌ民族の植民地化と東アジアの国際関係（上村英明論文）を取り上げている。ネーションはナレーションであるという国民国家の「神話」の生成過程に関するホミ・バーバの指摘をまつまでもなく、「日本」という戦後の国民国家像に回収されていく支配的な言説に対して、地域研究は果たして「われわれ」自身の国民国家像を相対化しうる積極的な〈地域〉像を提供しうるのかどうか。

本特集は当初は「地域研究と〈帝国の遺産〉」という観点から、16世紀以降、世界の各地域を包括する世界史が形成されていくなかで盛衰を繰り返した諸帝国による植民地経営とそれに密接に結びついた植民地研究の起源を、冷戦後の現在において直面する地域研究の緊急の課題として捉えかえすことを予定していた。しかし、スペイン・ポルトガルに始まり、オランダ、イギリス、フランス、ロシア、そして20世紀に入ってからアメリカ合衆国といった、様々な歴史段階に生じた〈帝国〉としての植民地大国の盛衰とその知の蓄積を、かくも小さな特集で扱うには当然のことながら無理があり、今回は断念せざるを得なかった。しかし地域研究企画交流センターとしては今後も継続して検討していかねばならない特集の大きな柱の一つである。今回はさしあたってその試みのささやかな端緒として、沖縄、日本軍占領地、そして北海道（アイヌモシリ）を〈地域〉として切り取って「日本」を対象とする地域研究像を浮かび上がらせてみたい。

（地域研究企画交流センター 助教授 白杵陽）